

古本屋の戦後

私の戦後・

古書店のこと

旭川市 古書古玩・尚古堂

金坂吉晃

古書肆・尚古堂という特異な仕掛をした看板をかがけて開店したのは滝川駅前・昭和三十七年の初秋であった。

私の来道は昭和三十年歳晩の某日、尾花うち枯らしたあげく、連絡船から軀を投ずるの勇気もなく俺は泳げるから駄目だと、渦巻く潮煙に身震いしてデッキから遙かにデスペレートの目をそいでいたとおもう。妻にうながされ彼女の故里岩見沢の駅を下りた。例年ならばすべてあたりは雪の銀世界の筈、駅を下りてみると舗道はガツガツに凍り上って、つるつるの氷の上を歩いているようだった。皆口ぐちに珍らしい年だという。物凄く寒くオーバーの襟を立ていても廃残の軀には骨に沁みこむ寒さだ。妻の案内で一步家に這入

るや急に温くなった。

明日からの生活をどうするのか、妻の父は当分眼鼻がつくまで、ここにをればいいと言っている。はくれているものの、東京を出る時に可成の金子を借りているし、友人からも相当な借金をしている。目下全くのゲル貧といった有様。懐中百円の金の持ち合せもない。明日は職安にいつてみることにした。

年末だというのに朝早くから役所にはもう何人かの列が出来ていた。その列の後についてゆくと列の前には机がおかれ、案内の人がいた。みると某炭坑の下受の組の人らしい。その組の坑内員募集であった。いきなり何番方がいいのか訊かれた。何と言っているのか少しの間解らなかつたが、やっと炭坑のことかと氣付いた。炭坑での仕事らしい。とうてい出来そうもない、ましてその経験もない。その日はすぐに家に帰って妻や両親にこの話をした。あぶなくたこ部屋の人になりそうだった。

昭和三十一年正月、早くに街に出て駅前の通りを歩いていると、平屋建、或る一軒の硝子戸に某生命保険の外務員募集の広告ポスターがはってあった。案内を乞うとこの家の主人が事務所

に請じ入れてくれた。椅子にかける様言はれたので坐っていると、只黙って私をみている。暫らくして保険の外交は若い人などやり手がないが、それでもいいかと言う。正月早々萬策尽きたあげくにここに這入ってきたといった。

事務所の壁には勇しい戦争中のポスターの様なスローガンが飾られてある。二三日で仕事の骨を覚える方法は何かと訊ねた。どうやら先方も手筈を感じたらしい。保険勧誘のパンフや様々の資料を持って来て、よくくく勉強したまえという。パラ／＼と頁をめくってみるとそんなに難しいことではないらしい。教科書丸暗記もいいたのだ。自信が湧いてきた。二三日中にもう一度伺うからその折にテストしてくれと頼んだ。では待つてるといふ約束をして帰ろうとすると、封筒に現金六千円を入れてくれた。ただで貰うてい

いのかと言うと、今日から君はうちの社員だと言う。人の情けと今日の幸運に感謝した。二三日経ってから先日支部長宅にゆく。早速、今日から近くの系列の某炭坑に君も一緒に同行こうと言う。一ヶ月分の定期券も買っていた。幸運に恵まれたようだ。道々今日は坑長や事務所の課長や主だった炭坑の人々に紹介するという。まことに手廻しのよいのに恐れ入った。もう名刺も作ってあった。

事務所では坑長の挨拶のあと、支部長から紹介して貰い、今度新しく本社から転勤したことを行い、保険のことならなんでも相談して欲しい旨、保険の歴史・系列会社のことなど解説つきで一時間口演したあと、坑長始め課長係長等の年俵い保険契約を済ますという手際によき加入手続を手伝ってくれた支部長は生れて始めてだと亢奮している。夜は炭坑の接待館で歓迎会をやってくれるという有難いおまけまであった。どうやら運氣が動いてきたと自覚した。

帰りの汽車の中で支部長は自らの生涯の中で貴公の様に二三日で保険のことが解ってしかも

勧誘の手口をみると天才的なセールスマンだといって口を極めて賞めた。またたく間に保険会社の扱い方も変化し、すぐに本社の講習会に呼び出され、赤平支部長をやれという。それを一年位やっている中に会社の制度が変わって支部長は管理職になり内勤扱いになるといふ。完全にサラリーマンにされそうだと氣付いたので早々に退社を決定し、滝川市に移り古書店をやるうと決心した。

開店はしたものの書棚に本が少いことが氣になって近所の有力な方を訪ねて古書を買って下さる様たのんでみた。明日は街の古紙屋を見廻り毎日の様に店の主人に頼んで自分で見てよきようなものを選んで目方で買うという方法を数年続けた。何分この古紙屋は滝川を中心にして広く砂川・歌志内・赤平・芦別から集まる古紙屋の大問屋であった。集まる量も毎日車で何台も入るといふ有様であった。幸い老主人に氣に入られて、一寸店の主人に顔を出すだけで思う様に倉庫での振舞いは自由になってきた。毎日ダンボール函で何個かを仕入させてくれる様にな

った。別に店の倉庫が必要になる様になってきた。店での仕入はほとんど古紙屋で充分であった。仕入が安いからそれなりにいい商いになった。

東京以北で詩集蒐集家の一人であった拓銀の高橋留治氏という方がおられた。

閉店ま際のうす暗いライトの下で書棚の前に、中折帽子を少しあみだにしてなにやら鼻歌らしいものを口ずさんで立っている。一見どっかの大学教授風、棚から本を抜き出す手ぐちがどうも素人ばなれがしている、かなり扱い馴れている感じ、店の机の傍に来て、名刺を下された。みると拓銀支店長高橋留治とある。始めて御会いしたのだが、それから、店の帰りに時々寄って下された。或る日明日の日曜日家に来いという。よろこんで伺った。廊下の隅には日銀の現金輸送函だという櫛の函が積み上げてあって、その中を開けると珍しい古書が現われてきた。

詩集道程、表紙白ボブリン装、題名・署名光太郎自筆

この本は戦災にもあわず高橋留治氏の蔵本となったのだが、窪川書店のシールが貼ってあり

調べるといろいろと物語があった。その辺の事情をよく知っている草野心平さんに手紙で問合せたらハガキが来た。

「高村さんが白山上にうられた本は風呂敷一ト包でしたがその中にあなたのいわれる道程がはいっていたのかどうかはわかりません、交渉中私は本棚など見ていたので」とある。

このハガキは勿論高橋さんに進呈した。高橋さんは詩集全部を北海道文学館に寄附されたので、このハガキも一緒に文学館にある筈である。

滝川の生活も長くなって少し有名になった。ロータリークラブやライオンズクラブのゲストとして呼ばれる様になった。専ら市立図書館建設を話題にして皆さんに呼びかけていた。いい塩梅に教育委員会から来てくれという。図書館計画の相談であった。

愈々その図書館のオープンの日が来た。私は朝日新聞の昭和十六年十二月九日開戦の翌日の号から三十年間の朝日新聞をまとめて寄贈することにして、市からトラックを出してもらって納めた。「私は現金三百万円を寄

付したのに、見れば古新聞を寄付した者の下にランクされている」といって、館長に文句をつけた馬鹿な奴もいた。世の中は面白いものだとつくづく思った。現在ではその新聞が館の目玉として利用されているという。その他歌書や詩集も大分贈呈した。

滝川は道北地方の交通の中心地、郷土史研究会の必要なことを感じ、市の主だった人々に呼びかけたところ、たちどころにその研究会が出来た。雑誌のネーミングは「そうらつぶち」アイヌ語で滝川を連想するという。

古書店をやり出す一方で、「円心数理学研究会」というあやしげなネーミングで小さな看板をかゝげて、易占をやり出した。「熊崎健翁」の本をベースにしてイギリスのキロの「生れ月の神秘」を譯して会員に頒布したりして滝川にいる十年位のうちに約七百人近くの新生児の名前をつけた。滝川ばかりか近郊の人にも評判となり、結構忙しくなってきた。その間古書の買入販売もうまくいっている様で、昭和四十二年には「北線」という古書目録を兼ねた短歌雑誌を発

行したりした。

毎日新聞の記者で有名な大森実氏、東京オプザーバーの主宰であったが、ふとしたことから知り合い、滝川青年会議所十周年の記念講演のオプザーバーに大森氏を依頼して欲しいと若い会議所の連中に頼まれて彼を呼んだらしたものだから一時呼び屋の声もなかった。

大森氏は北海道を舞台に外国語を主にする国際大学の理想を持っていて、当時の市長佐久間氏に大学の誘致をよびかけていた。佐久間氏は大森氏の話に吃驚して以後この話はたち消えになった。その後当時の助役であった吉岡氏が市長になり、また

また大学誘致が市長の公約となつたため、私にその話が廻ってきて、いろいろと大学の話をしている中に、滝川出身の代々木ゼミのオーナー、高宮氏に話を持っていき、中学時代の同期生、滝川商工会議所の会長少覚史山氏に頼めばうまくいくよと市長に話し、市長もその氣になつて一緒に高宮氏を訪問、国学院北海道短大が出来た。既に旭川に出ていた私に吉岡市長と滝川の副議長同道の上、御礼に來

たということもあった。

旭川に移った翌年昭和四十八年の新春の頃、中年の女性何人かがかたまつて来店した。いろいろ話をしたうちに郷土史の話がでてきた。どうだろう婦人だけ、女性のみ女性史を創つて見ないかと言った。雑誌も発行しなさい。その手伝いをしてあげると言った、女性だけの北海道史を創りませんか、申しかけた。それがもう二十五年になつたという。雑誌も二十九号を出している。この女性史研究会がよび水になったのか全道的に各地で女性史が生れる様になつた。

旭川に「ちろる亭」とよぶ老舗の喫茶店がある。もう亡くなつてしまつたが、下村保太郎さんといつて全国的な古書マニアがおられ、「情緒」という雑誌も出していた。その下村さんの朝のコーヒーのカウンターで生れたのが、無尽でやる「こまぐさ叢書」であった。それを発案したのも私であった。十五冊位出したとおもう。

次々と戦前からの愛書の連中が亡くなる昨今、全く淋しい限りである。